

清代古韻学

周 斌 武 著
白 田 真佐子 訳

第一講 清代古韻学研究概況

清代の学者は中国音韻学を研究したが、その業績は主に古韻学の面にある。つまり、中古音系を基礎として、周秦の古韻（『詩経』時代の音韻現象）を考えたのである。学術活動の特徴は先人の後を受けて発展させるということで、全くのところ継承性のある研究である。清代の学者の学問を修める方法は、主に「実証」にあり、实事求是の精神で大量の材料を集め、材料から出発して帰納法を運用し、比較研究し、個別の推論から一般に到達する。既知から未知を推論し、それによって結論を得る。この方法は現代科学とも比較的合う。清代の学者が中国音韻学を研究して成果があったが、それは以下の五つの面に要約することができる。

- 1) 言語が発展変化することを認識し、変化発展の観点から「古今音変」の学説を確立した。

中国語は周秦から漢魏晋六朝を経て隋唐に至るまで、古代においては一般の学者は言語音の歴史的变化を認識したのではなく、彼らは歴史的な観点から中国語の音韻現象も観察してはいない。歴史音韻の研究に対して、こんなにも長い歴史の時期がほとんど空白であり、周秦の古韻と中古音韻系統（今韻）の歴史の手がかりは少しも研究されなかった。宋代になると、古韻学はやっと研究され始めた。福建の人呉棫（才老）（?-1154、字は才老、武夷の人）は『韻補』五卷^{（補注¹）}を著した。彼は音訓と古代の韻文に基いて古の韻部が互いに通じ合ったことを説明した。『韻補』は『広韻』206韻によって、「古は某に通じる」「古は声か転じて某に通じる」「古は某に通じ、また某に転入する」などと明記している。この本は古代の著作を五十種引用しているが、条理が欠けていて、材料は多いが雑然としてお

り、上限は『尚書』、『詩経』、下限は宋人の王陽修〈1007-1072、字は永叔、廬陵の人〉と蘇軾〈1036-1101、字は子瞻、眉山の人〉兄弟〈弟は蘇轍、1039-1112、字は子由、眉山の人〉等の著作である。呉氏はしばしば主観によって結論を出し、彼の見解は自己矛盾している。『韻補』という本は、清初の顧炎武〈1613-1682、字は寧人、崑山の人〉の著した『韻補正』一卷において、原書の誤りが正されている。呉氏は中国音韻学史上で最も早く古韻学を研究した学者である。

宋代には鄭庠^(補註2)という学者もいて、彼は『詩古音弁』一卷を著したが、この本は伝わっていない。我々は元朝の人の著作から鄭庠が『広韻』の各韻を5つの大きな類にまとめたことが分かる。後に戴震が『声類考』卷三に鄭説を引用し、陰声を多くし、—脂・之・微・齊・佳・皆・灰・哈・支の一類であるが、六類とした〈『史略』^① p. 85参照〉。

明代になると、陳第〈1541-1617、字は一齊、連江の人〉が『毛詩古音考』四巻を著し、変化発展の観点から、つまり歴史的な観点から「時に古今があり、地に南北があり、字に更革があり、音に転移がある。」〈『毛詩古音考』自序〉と考え、言語音が時間と地域の違いによって変化することを明らかにした。時間に関わったり、地域に関わったりするのである。彼は『読詩拙言』で言う：「論者が謂うに、五胡が中国を乱してから、中原の人は江左に駆逐され、河淮の南北では間に夷狄の言語が混じり、発音の変化はこの時から始まったのかも知れない。一つの郡の中でも発音が同じでないのは地域に関わる。百年の間で言語が変化していったのは時間に関わる。」陳氏が考えるに、古人の音はもともと今とは異なり、凡そ今「協韻」と言うのはみな古人の本音で、随意に読み替えるのではなく、広く伝わって溶け込んでいったのである。例えば、「母」は古では「米」と読むべきで、「馬」は「姥」と読むべきで、「京」は「疆」と読むべきで、「福」は「偁」と読むべきであるといった類である(『文選』^②「毛詩古音考自序」p. 58参照)。陳氏は『毛詩古音考』に漢字を3498字列挙し、「本証」(『詩』が自ずから証拠となり、古音の根源を究明する)と「旁証」(他の経書等に乗っていて、秦漢より後で『風』『雅』より遠くは隔たつてはいないもので、古音の確実な読み方を探求する)^(補註3)を用いて古音学を研究した。例えば、彼は『詩経』の中の「服」の字の読み方を考証し、本証を14条、旁証を10条挙げている〈『毛詩古音考』卷一〉。何か言うには必ず証拠が必要で、典拠はその大本を探らなければならない。

陳第の研究方法は価値がある。彼の観点と方法は、清代の学者が古音学を研究するのに、直接影響があった。特に「古今音異」の理論は、清代の学者を大いに啓発した。段玉裁〈1735-1815、字は若膺、金壇の人〉は陳第の観点について、「深い見識で論を確立し、古本音は今音と同じでないとした。例えば、鳳凰が高い岡で鳴くと、啁噍(燕雀の声)の喙(口)は息をひそめるのである。」〈『六書音均表』卷一、「古十七部本音説」^(補註4)〉と言う。段氏には「音韻随時代遷移説」〈「音韻は時代に随って遷移するという説」、『六書音均表』卷一〉があり、凡そ「音

転」「音変」「四声」、その遷移の時代はすべて探求できると考えている。

顧炎武は『音学五書』三十八巻を著し、『音論』の中で更に陳氏の「詩無協韻」〈詩には協韻がない〉という説を展開している（『文選』「音学五書序」p. 68 参照）。『詩本音』では陳氏の「本証」「旁証」という方法を用いて『詩経』の韻部を研究している。顧氏は『詩経』の詩ごとに経文を全部列挙し、発音の注をその経文の下に置き、凡そ今音（中古音）と同じものは『広韻』某部と明記し、今音（中古音）と同じでないものは古音某と明記している（どの詩も全部経文を並べ、その文の下に音を注し、凡そ今音と合うものは注に『広韻』某部と曰う。今音と異なるものは、注に古音某と曰う）。明らかに、顧氏の『詩本音』は陳第の『毛詩古音考』よりずっと完全で詳細である。例えば、『詩本音』の「服」の字は陳第の挙げた例の他に、更に本証 17 条、旁証 15 条を挙げている。だが、顧氏の古音学の研究も江永が更に詳細なものには及ばない。

江永〈1681-1762、字は慎修、婺源の人〉『古韻標準』四巻を著し、音韻学の観点は陳第、顧炎武と同じであり、「古今音異」の学説を継承した。江氏は『古韻標準・例言』の中で言う：「韻書が今まで伝わり、原本ではないが、その大筋は周顛・沈約・陸法言^{（補注5）}の旧から出て、部を分けて字を並べているが、古とは合わせることができず、その時の音がすでに変化しているからで、古にとらわれて今にそむくことはできない。その間の字は同じようでも、音が実は異なっていて、部が別であるからには等位も異なっており^{（補注6）}、五方の音が混じり合っているが、わずかなものを分析し、音切を審定し、脈絡を細尋すると、つぶさに条理がある。」

陳第〈1541-1617〉から江永〈1681-1762〉まで〔西暦の 16 世紀末から 18 世紀半ばまで隔たること 160-70 年——すなわち（1541-1617）から（1681-1762）〕、南宋以来のいわゆる協韻の説と「随意転読」の法、これらの根拠の少しもなかった見解が透明になり始めた。

2) 諧声声符の同じものは古韻が必ず同部であるという説を創始した。

段玉裁は『六書音均表』五巻を著し、古韻を十七部に分け、古韻分部の面では顧炎武や江永よりも更に精密となった。彼は中古音系の支脂之の三つの韻類を上古では三部に分けた。段氏は戴東原^③〈1723-1777、名は震、休寧の人〉に宛てた手紙〈「寄戴東原先生書」、『六書音均表』巻首〉の中で指摘する：「支脂之微齊佳皆灰哈の九部は由来からすると、古韻では一部に合わさっていますが、これを詳しく調べると、支佳が一韻で、脂微齊佳皆灰が一韻で、之哈が一韻です。顧氏、江氏がともに分らなかったのです。」

更に、段氏が古韻学を研究することによって、重要な発見があり、それは諧声系統と韻文の脚韻（『詩経』の押韻を含む）の一致性である。彼は「古諧声説」〈『六書音均表』巻一〉で指摘する：「一つの諧声符で一万の字が諧い、一万の字で必ず同じ諧声符である。同じ諧

声符は必ず同部である。これから明らかなように、部分的に音が変化し、平入の相配や四声の今と昔は同じでないことが分かるのである。」

段氏のこの発見は、清代の学者が韻文の脚韻と形声字の諧声系統に基いて古韻を研究することが大変うまくいき、また正確であることを証明している。段氏のいわゆる「同声必同部」〈同じ諧声符の字は同じ部であるべき〉は、以下の点を十分に説明している。すなわち、韻文の押韻と形声字の諧声系統は周秦の古韻の声韻系統のある特殊な現象を客観的に正確に反映し、古韻系統のある特徴を提示している。

3) 古の四声は今音とは同じでないという説を創始した。

「古四声不同今音」〈古の四声は今音とは同じでない〉、これは清朝の学者が古声調を研究する上で形成した重要な概念である。古声調の研究については顧炎武から始まって、それぞれ独自の見解がある。顧炎武は「四声一貫説」を創始し、『音論』巻中で言う^{〔補注7〕}：「四声の論は江左に始まったと言うが、古人の詩には遲速と輕重の区別があるので、平声は多く平声と韻となり、仄声は多く仄声と韻になる。そうでないものもあり、上声は転じて平声になるものもあり、去声は転じて平声・上声になるものがあり、入声は平声・上声・去声になるものもあって、歌う者は抑揚が高下するのである。それで四声を併用することができる。……」

段玉裁は周秦・漢初には平上入はあったが、去声はなかったと考えた。彼は言う：「古の四声は今音と同じでないのは、古本音が今韻と同じでないようなものである。周秦・漢初の文を考えると、平・上・入があつて去声がなかった。魏晉に及び、上入声は多く転じて去声となり、平声は多く転じて仄声となり、そこで四声が大いに備わつたのである。……今学者が『三百篇』といった書物を読むには、今韻の四声で古人を律する。陸徳明・呉棫は皆「協韻」と言っている。顧炎武の書も平仄通押、去入通押と言っているが、古の四声は今とは同じでなかったのを知らないのであり、…… また何で惑うのだろうか。」〈『六書音均表』巻一、「古四声説」〉

段氏は更に古声調は平上が一類で、去入が一類であると考えた。いわゆる「上と平は一つである。去と入は一つである。」ということ^{〔補注8〕}、これも一つの見解である。

孔広森〈1752-1786、字は衆仲、曲阜の人〉は、古声調はただ平上去だけで入声はないと考えた。また、-mで終わる入声韻、例えば「輯」「合」といった一類こそが本当の入声であるとも考えたのである〈『詩声類』自序〉。

江有誥〈1773-1851、字は晋三、歙県の人〉は、古声調にも四声があるが、声調は今韻とは同じでないと考えた〈「再寄王石隴先生書」^{〔補注9〕}〉。後に黄侃〈1886-1935、字は季剛、蕪春の人〉は、古声調には「上」「去」がなく、ただ「平」「入」があると考えた。これも一つの見解

である（「詩音上作平証」^{〔補注10〕}）。

4) 古韻系統の陽声と入声とを関連づけ、陰声と陽声も関連づけて、「陰陽對轉」という学説を創始した。

「陰陽對轉」とは古代の音韻変化の現象である。いわゆる「對轉」とは鼻音韻尾を伴う韻母が韻尾を失って開音節となることであり、或いは開音節の韻母に鼻子音が加わり閉音節となることである。この音韻変化の現象は規則的に『詩經』の韻と形声字の諧声現象の中に反映されている。清儒の戴東原は古韻学を研究し、「互轉」という重要な音韻現象を発見し、そこで、彼は「音轉」を古韻の分類の中に入れた。戴氏は古韻を九類二十五部に分け、古韻系統の陰声と入声の「同部」の関連づけ、陰声と陽声の「對轉」の関連づけを妥当に行い、「正轉」と呼ばれる方法も定め、この方法に基いて古韻系統の各部の相配と秩序を明らかにした。方法は三つに分かれる（戴震「答段若膺論韻」、『声類表』卷首参照）。a) 転ずるが、その類を出ない。例えば、脂が皆に転じ、之が哈に転じ、支が佳に転じる等。b) 相配互轉。例えば、真・文・魂・先が脂・微・灰・齊に転じる；換が泰に転じ、哈海が登に転じ、侯が東に転じ、厚が講に転じ、模が歌に転じる等。c) 連貫遞轉。例えば、蒸登が東に転じ、之哈が尤に転じ、職徳が屋に転じ、東冬が江に転じ、尤幽が蕭に転じ、屋錫が覺に転じ、陽唐が庚に転じ、葉が錫に転じ、真が先に転じ、侵が覃に転じる等。戴氏は「正轉」を使って陰声字と入声字を組み合わせて部の分合を定めたのであり、『詩經』など韻文の押韻だけに基いて証明したのではない。戴氏の言う「正轉」とは母音韻尾（収喉音）と -m（収唇音）-n（収舌歯音）-ŋ（収鼻音）という韻尾で陰声・陽声・入声の分合相配の秩序を定めたものである^{〔補注11〕}。

孔広森は戴東原の学問を継承した。孔氏は戴氏の古韻分部を展開し、戴氏の「正轉」の中の「相配互轉」、例えば哈が登に転じ、侯が東に転じる等、明確に「陰陽對轉」の見解を提起した。

孔氏は『詩声類』十二巻を著し、古韻を十八部に分け、東・冬の分部を主張し、古韻学について創意工夫があった。段玉裁は『声類表』序の中で言う^{④〔補注12〕}：『詩声類』は陽声に九あり（元・耕・真・陽・東・冬・侵・蒸・談），陽声に九あるという（歌・支・脂・魚・侯・幽・宵・之・合）。元歌は入が同じ、耕支は入が同じ、真脂は入が同じ、陽魚は入が同じ、東侯は入が同じ、冬幽は入が同じ、侵宵は入が同じ、蒸之は入が同じ、談は入がない〔按ずるに談は入声の盍部と相配する〕。平入で相配している。この書は精心してよく悟っており、先生（戴震を指す）と私の説とも異なっている。東・冬を二つに分け、侯・幽・尤に配したのはとりわけ妙語である。もしも先生が見ることができたなら、どのようにお思いになるのかは分からないが。」

5) 音韻の歴史的変化に従って、「正音」と「転音」の説を創始した。

段玉裁は『六書音均表』の中で、「音不能不變」〈音は変化しないことはできない〉という観点から古「本音」と「音変」の説を創始した。彼は『詩経』によって十七部に分けている。段氏は言う：「顧氏『詩本音』、江氏『古韻標準』は『三百篇』を根拠にしているが、『三百篇』の文を全面的に取り上げず、部を分けて韻譜を集めているのである。」〈『六書音均表』巻四、「詩経韻分十七部表」^(補註13)〉読者に周秦の古韻と中古音系とが同じでないことを明らかにするため、段氏は「古本音」と「古合韻」の説を創始したのである。段氏は言う：「凡そ今音と部が異なるのは古本音である。古本音に基いて齟齬があり合わないのは、古合韻である。本音の謹厳さは唐宋の人が官韻を守っているのと同じで、合韻の変化の理は、唐宋の詩が通韻を用いるのと同じである。」〈『詩経韻分十七部表』〉段氏はまた言う：「本音で合韻をないがしろにせず、合韻で本音を惑わさず、三代の韻は明らかである。」〈『詩経韻分十七部表』〉

実は段氏のいわゆる「古合韻」とは、『詩経』時代に現れた音韻変化をまさしく反映している。清代の古韻学者は顧炎武から、『詩経』の押韻と群經の韻語及び形声字の諧声系統に基いて古韻を研究し、次第に諧声と詩韻の一致性を発見したのである。しかし、諧声時代は『詩経』時代より早いので、客観的な音韻事実は時代が異なり、音が変化することを反映している。古韻学者は諧声と詩韻に相違があることも発見した。例えば、「風」に従う形声字の「楓・颯・颯」は東部にあり、「嵐」は侵部にある。詩韻の「風」「心」(侵)は通押するが、諧声の「風」「嵐」は異なる韻である。清儒には周秦の韻語の中で異なる韻部の間に音転現象が存在することが分かり、そこで「正音」と「転音」の説を創始したのである。

清儒の錢大昕(1728-1804、字は曉徵、嘉定の人)は言う：「古人が文章を書くには、声母の近さで文を作り、音となるのである。正音があつて形声の基準を定め、転音があつて文字のすべてに通じる。転音の例は少ないものが多いものに従うのであつて、多いものが少ないものに従うのではない。」〈『潜研堂文集』巻十五、答問十二^(補註14)〉

錢氏のいわゆる「少」とは上述の特殊な音韻現象を指し、つまり古韻の変例なのである。いわゆる「多」とは詩韻と諧声の一致性を指すのであり、つまり韻の常例である。いわゆる「転音」とは、ちょうど時代が同じでないので、音には移り変わりがあるということの反映である。錢氏は『詩経』の韻や群經の韻であろうと、ごく少数の「転音」現象が存在すると考えた。彼は潜研堂「問答」の中で、いわゆる「一字両読」及び正音と転音の区別を明らかにし、『詩経』の韻と群經の韻語の中での「転音」現象をはっきり示した。彼は言う：「古人は一字で異なる読み方をすることもあり、文字偏旁が諧うものは正音と謂う。言葉の清濁に近いものは転音と謂う。音の正しいものは定めがあるが、音の転ずるものには方法がない。正音は分別部居ができるが、転音はただ一字が近いだけで、仮借互用して、

清代古韻学

他の字とは通用しない。」〈『潜研堂文集』卷十五，答問十二^{〔補註15〕}〕〔周斌武著「錢大昕与清代音韻学」，復旦学報1985年第4期参照^⑤〕

附注

- ① 『史略』とは周斌武著『漢語音韻学史略』，安徽教育出版社，1987年を指す。
- ② 『文選』とは周斌武選注『中国古代語言学文選』，上海古籍出版社，1988年を指す。以下、『文選』と略称する。
- ③ 戴東原（1723-1777）とは戴震のことで，東原はその字であり，中国の学者はしばしば戴東原と呼ぶが，それには尊重の意味がある。
- ④ 周氏の文章は段玉裁（1735-1815）『声類表』序を引用する際，補充と注釈を付けている。
- ⑤ 復旦学報とは『復旦学報』社会科学版である。69頁参照のこと。

編集の説明

この「清代古音学」はもともと周斌武先生の講義原稿である。受業の白田が周先生の手稿をパソコンでタイプし，書名と巻数等を加筆した。文末の附注も白田が付けたものである。ただ，周氏の文章で挙げられている学者について，その生没年や本籍等は今回注を付けていない。

周斌武先生は復旦大学中文系教授で，1924年12月生まれ，江蘇太倉の人。先生の専門は古代漢語，漢語音韻学と文字学である。主要な学術著作には『漢語音韻学史略』，『中国古代語言学文選』等があり，論文を各種の学術雑誌に発表されている（王増藩主編『復旦大学教授録』，復旦大学出版社，1992年，384-385頁参照。また，陳建初，吳沢順主編『中国語言学人名大辞典』，岳麓書社，1997年，217-218頁）。ここ数年の著作には『語言与現代邏輯』（復旦大学出版社，1996年，張国梁と共著），「古詩探源」（『古田敬一教授頌寿記念中国学論集』，日本・汲古書院，1997年，3-20頁）等がある。

1989年9月上旬から1990年11月下旬まで，私は復旦大学で研修し，研修論文は王念孫（1744-1832）〈字は懷祖，高郵の人〉の古韻学に関するものであった。当時私の研究計画（研修内容）は何項目もあり，その中の一つは授業（音韻学，訓詁学，文字学）の聴講である。嚴修先生の訓詁学，周斌武先生の文字学とも沢山の学生が熱心に受講していた。周先生はまたわざわざ私のために清代古韻学という授業を全部で10回開講して下さった。毎週土曜日の午前，私は周先生のお宅に行って清代古韻学の授業を受けた。授業はマンツーマンで，学生は私だけである。最初，周先生は私のことを学校が派遣した研修教師とみなされ，清代古韻学の講義原稿を私に渡し，日本語に訳して，日本の学生に教えてほしいとのこと

だった。残念なことに、帰国後、中国語の他に中国語音声学、中国文字学概論と『説文解字』及び『論語』等の授業はしたが、いまだに清代古韻学を教える機会はない。1998年3月上旬上海に行った際に周先生にお目にかかり、東京に戻った後、講義原稿を日本の雑誌に掲載して留学の記念にしたいと先生に手紙を書いた。周先生は全く同意との返事を下さり、中国音韻学の知識が日本に伝わることを希望しますとのことだった。1999年12月下旬私はまた上海に行き、周先生と印刷のことについて相談した(旅費は大部分愛知大学による)。今回は日本語に訳すのが間に合わず、原文だけを掲載し、しかも第一講のみである。第一講から第十講までのタイトルは次の通りである。

- 第一講 清代古韻学研究概況
- 第二講 清儒による古韻研究の材料と方法
- 第三講 古韻の音価の推定について
- 第四講 『詩経』韻部の概述
- 第五講 王念孫の古韻学
- 第六講 江有誥の古韻学
- 第七講 段玉裁と『六書音均表』
- 第八講 清代古音学者の古韻分部と『広韻』の分割
- 第九講 清代以来の上古声母系統の研究
- 第十講 古声調について

18年前、私の日本の先生である頼惟勤先生(1922-1999)は私たちお茶の水女子大学の大学院生に江永(1752-1786)『古韻標準』を伝授して下さい、私は先生の上古音研究の学術的な成果と中国の伝統的な音韻学と結び付けたいと思っているのだが、おそらくこれは難しいことであろう。

なお、『復旦大学教授録』は東京外国語大学の小林二男先生が貸して下さいたものであり、復旦大学の鍾敬華先生には編集の説明を手直しするに当たって貴重なご意見をいただき、お二人に心から感謝したい。もちろん、以上の編集の説明は、白田が責任を負って書いたものである。

白田真佐子 1999年12月

(原載は、中国語学研究『開篇』vol. 19, 1999年, 174-183頁。原文は中国語。)

1. 翻訳についての覚書

周斌武先生の文章は、日本の学部の3年生にいきなり講義するには難しい。まず、『広韻』を中心に中古音のことを学んで、清代古韻学については、音韻に興味がある人に大学院あたりで伝授するのがよいと思う。「編集の説明」にも書いたが、私が江永の『古韻標準』を

習ったのは大学院（修士1年）である。

さて、翻訳に当たり、引用文（文語）を日本語訳する際には、周先生に現代中国語訳を示していただいたところが数箇所あり、活用したものについては補注〈3, 6, 13〉に記した。但し、引用文も含めて、翻訳全体はすべて白田に文責がある。その他、今回翻訳するに当たっての覚書を記しておく。

(1) 注について。学者の生没年や出身地、出典等は本文中に〈 〉で挿入した。生没年や出身地は主に、姜亮夫『歴代人物年里碑伝綜表』（台湾・文史哲出版社、1985年再版）によったが、江有誥の生没年は神田喜一郎「江晋三先生年譜」（『支那学』第10巻第1号、1940年、111-137頁）を参照し、黄侃については張世禄の「前言」（補注10参照）、1頁による。また、出身地の省名は省略。というのは、省名までは姜氏の表にも逐一載っておらず、しかも錢大昕は「江蘇嘉定」の人となっているが、現在嘉定は上海市に属するなど、問題もあるからである。それから、本文に入りきれない長い注は「3.補注」としてまとめた。原文に付けた「附注」というのは、私が周先生の文章をタイプした時に、どうしても必要なものとして付けたもの。

(2) 術語の日本語訳について。例えば、原文中の「漢語」は中国語と訳し、「漢語音韻学」も中国音韻学と訳したが、これは慣例に従っているので、特に問題はないと思う。古韻分部（こいんぶんぶ）は古韻部分（こいんぶんぶん）のミスプリと誤解されることがあり、術語の使い方は難しい。なお、古音と古韻は同じことで、私はどちらも「こいん」と読んでいる。

(3) 表記について。傍点等、印刷の都合上改めた箇所もあることをお断りしておく。算用数字と漢数字、また句読点、例えば日本語では余り使わないセミコロン等、日本語として自然になるよう、適宜改めてある。原文の頁数表記は“p.”であるが、これはそのままとしてあるので、「編集の説明」とは統一が取れていない。原文のミスプリについては「2.原文の正誤表」として今回列挙した。

(4) 「編集の説明」について。白田が中国語で書いたものであるが、これも日本語に訳して掲載する。留学中に仕上げた王念孫の古音学に関する論文は、補遺を付けて台湾で公表することができた。「論研究〈王念孫的古音学〉上の文献資料 —— 1990年の研究与2002年の補遺——」、『第七届清代学术研讨会论文集』（下）、国立中山大学中国文学系（台湾・高雄）、2002年、977-987頁。王念孫の『説文諧声譜』については、私が三十になるかならないかの頃、頼惟勤先生が示唆して下さったものである。中国でそれを試みたのは若気の至りであったが、そのささやかな報告が拙文である。

(5) 所属等について。周斌武先生はすでに現職を退かれ、鍾敬華先生も日本で教鞭をとっておられるが、周先生はキャンパス内の宿舎に住まれ、鍾先生は大学院が復旦というこ

とで、お二人とも復旦大学と記した。私自身は1999年3月まで東京の杉並区内に住み、4月から愛大勤務ということで豊橋に住んでいる。頼惟勤先生は1999年7月に亡くなられた。

2. 原文の正誤表

以下の表のみ、原文に簡体字を用いる。

原文の頁・行	誤	正
175頁20行	秦汉以下《风》《雅》未远者	秦汉以下去《风》《雅》未远者
176頁19行	势不能混古违今	势不能泥古违今
177頁13行	韵文的韵脚形声字的谐声系统	韵文的韵脚和形声字的谐声系统
178頁3行	古声调不同今韵，就古本音不同今韵也	古四声不同今韵，犹古本音不同今韵也
178頁18-19行	形声字和谐声现象之中	形声字的谐声现象之中
179頁8行	(喉塞音)	(収喉音)
182頁10行	1988年9月上旬至1989年11月下旬	1989年9月上旬至1990年11月下旬

3. 補注

- 〈1〉呉械の『詩補音』を輯佚し研究した張民権氏の労作は、『宋代古音学与呉械《詩補音》研究』（商務印書館、2005年）である。その他、張氏の古音学に関する著作からは学ぶべきことが多い。『清代前期古音学研究』、北京廣播学院出版社、2002年。『音韻訓詁与文献研究——張民権自選集』、北京廣播学院出版社、2004年。
- 〈2〉鄭庠の生没年は不明。鄭氏の『詩古韻弁』は熊朋来『經說』（『通志堂經解』総経解）卷二「易詩書」の「易詩書古韻」に引用されている。鄭氏の古音学説については張民権『宋代古音学与呉械《詩補音》研究』（補注1前掲）、13-18頁参照。
- 〈3〉原文の「以究古音之委」について周斌武先生は「用来探求古音确实的読音。委—確切，确实。」（それによって古音の确实な読み方を探求する。委—確かな，确实な。）という訳注を示して下さった。今、それに従う。
- 〈4〉「鳳鳴高岡」とは、『詩經』の「大雅，卷阿」第九章「鳳凰鳴矣，于彼高岡。」によるもの。「古十七部本音説」の日本語訳注は平田昌司「段玉裁『六書音均表』訳注（三）」（『均社論叢』8、1979年、96-111頁。「古十七部本音説」については、106-108頁参照）があり、大いに参考になる。「古十七部本音説」の中国人学者による注釈については、周斌武『文選』（附注②参照。その138-151頁）、汪寿明『歴代漢語音韻学文選』（上海古籍出版社、1986年99-106頁）、汪寿明『中国歴代音韻学文選』（華東師範大学出版社、2003年、92-98頁）がある。それから、陳第の『説詩拙言』の注釈は洪誠が試みているが、全文については『中国歴代語言文字学文選』、江蘇人民出版社、1982年、210-211頁参照。
- 〈5〉周顒と沈約、陸法言については、趙誠『中国古代韻書』（中華書局、1979年）、8頁、21-31頁参照。
- 〈6〉「勢不能」についての周先生の訳注は次の通り：「勢—情況也。“勢不能”情況不容許。或“絶対不可

清代古韻学

- 以”。(勢一情況のことである。「勢不能」とは情況が許されない。或いは「絶対によろしくない」。)
- 〈7〉『音論』の訳注(日本語)には「清代経学の研究」班「顧炎武『音論』訳注」(『東方学報』(京都大学人文科学研究所)第51冊,1979年,617-723頁)がある。「古人四声一貫」については,681-688頁参照。
- 〈8〉「古四声説」に見える原文は次の通り:「古平上為一類,去入為一類。上与平一也。去与入一也。」
- 〈9〉江有誥と王念孫が古声調について書簡で論じたことについては,周斌武『史略』(附注①参照),101頁に詳しく,兩人とも顧炎武の「四声一貫説」には同意していなかった。江有誥と王念孫の書簡は『唐韻四声正』巻首(『江氏音学十書』)に収録されている。
- 〈10〉『黄侃論学雑著』,上海古籍出版社,1980年,174-176頁。張世禄の「前言」4頁も参照のこと。
- 〈11〉戴震の七類二十部説は『声韻考』巻三「古音」,九類二十五部は「答段若膺論韻」に見え,それぞれ1773年,1776年のもの。詳しくは頼惟勤「上古音分部図説」(もと1958年。『頼惟勤著作集I 中国音韻論集』,汲古書院,1989年,86-99頁),88頁を参照。その95頁には「9. 戴震 癸己 VII類20部」の図があり,「取喉音」「取唇音」「取舌齒音」「取鼻音」が示されている。「取喉音」(喉に収める音),「取唇音」(唇に収める音),「取舌齒音」(舌齒に収める音),「取鼻音」(鼻に収める音)については,「答段若膺論韻」参照。
- 〈12〉段玉裁『『声類表』序』の注釈は,周斌武『文選』(附注②参照),152-161頁参照。
- 〈13〉顧炎武『詩本音』は『詩経』の経文を全部引用して,押韻の箇所を指摘するが,そのことを「未取『三百篇』之文」と段玉裁が指摘しているとは思えず,周先生に注釈を仰いだ。先生の解釈は次の通り:「段玉裁説:“顧炎武的『詩本音』,江永『古韻標準』雖然是根拠『詩経』用韻確定分部,但他們並不是從『詩経』的原文把語言材料收集起来再按照一定的格式作出分部,而是從中古音系追溯到周秦古韻,從而確定『詩経』的分部。”(段玉裁は言う:「顧炎武『詩本音』,江永『古韻標準』は『詩経』の押韻に基いて分部を定めているが,彼らは『詩経』の原文から言語材料を集めて,それから一定の形式に従って分部をしたのではなく,中古音系から周秦の古韻に遡って,それによって『詩経』の分部を定めたのである。)」それから,林慶勳氏の解釈も参考になる:『段玉裁之生平及其學術成就』,台湾・中国文化学院中国文学研究所博士論文,1979年,244頁。
- 〈14〉この引用文の前の方で,錢大昕は声母が近いので押韻している例を挙げて,顧炎武の説を批判している。詳しくは『史略』(附注①参照),105頁参照。
- 〈15〉「一字兩説」という表題の文章そのものは,錢大昕『十駕齋養新録』巻五にある。注釈は周斌武『文選』(附注②参照),131-137頁参照。